

日本における比較思想の展開

——弘法大師より始まる——

中 村 元

このたび、比較思想学会の秋季特別大会が坂出市の市民ホールで開催されることになったことは、会員であるわれわれの至上のよろこびである。従来比較思想学会は、例会はしばしば行なっており、今年はすでに六月に長野県の松本で信州大学において年次学術大会を開いたが、今年は特別にさらにその上に秋季特別大会を坂出市、坂出市教育委員会の後援を得て、また財団法人鎌田共済会の協賛のもとに、かくも盛大に行なわれることになった。それについては、坂出市駒止町の二一世紀国際交流芸術学院の指導者である濱野年宏画伯が数年前から非常な熱意をもって計画、立案、配慮下さった。そして一々お名は申し上げないが、地元香川県の方々の熱烈な後援、協力がここにみごとに花を開き、実を結んだわけである。

このように盛大に気運が盛り上ったのにはわけがある。因縁が

熟したのである。わが国における比較思想研究の開拓者であり、比較思想学会顧問として陰に陽に指導された川田熊太郎博士は、香川県の出身である。明治三十二年三月十五日に香川県大川郡に生れ、県立高松中学校を卒業し、京都の第三高等学校第一部丙類を卒業し、東京帝国大学法学部を卒業し、続いて東京帝国大学文学部の哲学科を卒業し、のち日本女子大学、東京大学、駒沢大学で哲学を教えられた。昭和五十六年三月三十一日に逝去されたが、川田博士はプラトンを始めとして西洋哲学に深い造詣のある方であり、かつ東洋の思想についても非常に深い研究をしておられた。哲学者のあいだでは東洋思想だの仏教だのにはほとんど注意する人のいなかった時代に「比較哲学」ということを唱導されたのである。

では、どうしてそういう方向に学問を進められたかという点、

お宅が香川県の真言宗の家であったから、仏教的なものの考え方になじんでいたからだと言われた。弘法大師が博士の人格の中に生きていたのである。徳川時代に真言律を唱えた慈雲尊者がいかに重要な人であるかということをおたくしに説き明かされたのは、仏教の専門学者ではなくて川田博士であった。このようなわけで、川田博士の故郷で特別大会が開かれたことは、決して故なきことではない。弘法大師の声が呼びかけられたのであろう。

しかしただ学問的志向だけでは事は実現しない。それには機縁を必要とする。この運動の起爆剤となった方がおられる。それは金沢市の松尾宝作博士である。松尾宝作博士は明治三十四年七月十二日の生れで、金沢で病院を開いておられた。非常な精神家であって、北陸地方に仏教研究を興すことに大いに貢献され、亡き母上の菩提を弔うために寺院を建立し、金沢大学に教育社会センターを寄付された。昭和六十年九月十日歿。第二次世界大戦直後の混乱の中から精神運動を起し、おたくしはそのころから博士と心をゆるす間柄となったのである。おたくしは度々お目にかかり、次のようなことを話し合っていた。

現在のわが国の思想界において顕著な現象は、思想の混乱、あるいは思想に関して自信の喪失ということである。学者は思想を研究しているが、ただ外国の学者の言ったことを祖述しているか、あるいは東洋の古典を訓詁注釈しているだけではないか、ということが反省される。

この点についての是正の動きが在野の一知識人から始まった。その切っかけを作ったのが松尾宝作という一医師なのである。

松尾宝作氏は医師であるが、かねて仏教を中心とする東洋思想の研究を熱心に行なっていた。松尾博士には「一の論理」という著書があり、英訳もなされている。Hosaku Matsuo: *The Logic of Unity: The Discovery of Zero and Emptiness in Prajñāpāramitā Thought*. With an introduction and glossary of terms by the translator Kenneth Inada, and the forward by Hajime Nakamura. SUNY Series in Buddhist Studies, Albany, New York: State University of New York Press, 1987. Reviewed by Richard Pilgrim. *Philosophy East and West*, vol. XXXIX, No. 3, July 1989, pp. 357—359.

博士はかねがね言っておられた。——現在日本にはいろいろな思想が外から入って来ている。これらに対して日本人はどう対処したらよいのか？ 仏教学者はただ古典の訓詁注釈を行なっているだけで、諸思想に対する批判的対決というものがなされていない。その必要性を学界の指導者の方々にいくらか進言しても取り上げてもらえない。そこで松尾博士は、僅かの人たちでも検討研究を開始すべきではないか、と考えて、グループによる研究をするために若干の人々を推薦してくれと依頼された。それは昭和四十七年ころであったと記憶する。おたくしは適任と思われる方々を数人ご推薦ただけで、何もしなかったし、また何もできなかった。

た。ところがグループを作ったことが急速に発展する動きとなった。これが今日の比較思想学会の始まりである。

*

ところでさかのぼって考えてみると、比較思想という試みをおが国で最初に行なったのは、弘法大師空海である。さらに比較思想の体系的論述を世界で最初に行なったのも弘法大師であるということが言えよう。その次第は次のごとくである。

まず、かれの最初の比較思想的労作は『三教指揮』である。三教すなわち儒教と道教と仏教の究極にあるものを開明するというのであるが、かれがまだ唐へ留学する以前に、二十四歳のときに著したというのであるから、その学殖と熱意に驚かされる。

その序文は、かれの精神的遍歴を示す自伝的論述である。

〔以下の邦訳は、福永光司訳『三教指揮』（中央公論社『日本の名著』3、昭和五年、二五三ページ以下）によって引用する。〕

序

文章の成立は偶然ではなく必ずいわれがある。（古人もいうように）天が晴れわたっているとさまざまな天文現象を示し、人が感動すると筆を含んで文章を書く。だから伏羲の八卦や老聃の著作、詩経や楚辞などの文章も、人が心に感動し、その感動を紙に書きしるすことによって成立したものである。凡夫と聖者とは人間が違い、古と今とは時代が異なるとはいうものの、人たるもの、心の悶えを晴らそうとすれば、

詩文を作っておのれの志を述べずにおれようか。

私は十五歳のとき母方の叔父で禄高は二千石、親王府の文学という職にあった阿刀大足について学問にはげみ努力研鑽した。そして十八歳になると大学に遊学し、雪あかりや螢の光で読書した古人をめざして、それでも怠ろうとする気持をくじき、また縄を首にかけ強を刺して睡魔を防いだ古人にならって、おのれの不勉強を上げました。

ところが空海は、或る僧に出会って仏教に導き入れられることになった。

ところがここに一人の僧侶がいて、私に虚空蔵聞持の法（虚空蔵菩薩の説く記憶力増進の秘訣）を教えてくれた。その秘訣を説いている『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』という經典には、「もしも人々がこの經典に示されている作法にしたがって、虚空蔵菩薩の真言すなわち『南牟・阿迦捨・羯婆耶・唵阿唎迦・麼唎慕唎・莎嚩訶』という陀羅尼を百万遍となえれば、すぐにあらゆる經典の教えの意味を理解し暗記することができる」と書かれている。

そこで私は、これは仏陀のいつわりなき言葉であると信じて、木を錐もみすれば火花が飛ぶという修行努力の成果に期待し、阿波の国の大滝岳によじのぼり、土佐の国の室戸崎で一心不乱に修行した。その私のまごころに感応して、谷はこだまで答え、虚空蔵菩薩の応化とされる明星は、大空に姿

をあらわされた。

かれは浅ましい汚れた世の中を通れる氣持を起した。

かくて私は、朝廷で名を競い市場で利を争う世俗の榮達は刻々にうとましく思うようになり、煙霞^{えんか}にとざされた山林の生活を朝夕にこいねがうようになった。軽やかな衣服をまとい肥えた馬にまたがり、流れる水のように疾駆する高級車の贅沢な生活ぶりを見ると、電^{いなす}のごとく幻のごとき人生のはかなさに対する嘆きがたちまちにこみあげてき、体の不具なもの、ぼろをまとった貧しい人々を見ると、どのような因果でこうなったのかという哀しみの止むことがない。目にふれるものすべてが私に悟りへの道をすすめ、吹く風のつなぎとめようがないように、私の出家の志をおしとどめることは誰にもできない。

ところが世間には、仏教を非難する人々がいる。そこで自分はその思想と対決せねばならぬことになった。ここに比較思想が成立する。

ところがここに幾人かの親友知己がいて、私を仁義五常のきずなでつなぎとめようとし、忠孝の道に背くものとして見すてようとするが、私はこう考える。生きとし生けるもののもちまえば同じではなく、空を飛ぶ鳥、水にひそむ魚といったようにそれぞれに性分の違いがある。だから聖人が人をみちびくには、三種の教を救いの網として用いるのであり、

いわゆる「釈」と「李」と「孔」（仏教と道教と儒教）とがそれである。この三種の教えには浅いと深いとの違いはあるが、いずれもみな聖人の説いた教えである。その同じ教えの網のなかに身をおけば、忠孝の道にそむくことなどありえないのだ、と。

以上は、哲人、知識人との対決である。

しかし世間には、哲学思想そのものが不用、無意味であり、考えるというのはいやだという人もいる。かれらとも対決せねばならぬ。

さらにまた私には一人の母方の甥がいて、性質はひどくねじけ、狩獵や酒や女に昼も夜もおぼれこみ、賭博ややくざ稼業を日常の仕事にしている。思うに彼の習性は周囲の悪風に染められた結果であろうが、「彼」と「此」との二つの事、すなわち親友知己の反対と甥の放蕩無頼とが、日ごとに私の心を発憤させた。

すでに遠い平安時代の初めにも、非行少年、非行青年がいて、勝手なことをはざいていたというのだから面白い。

この二種類の人々を説得するために『三教指揮』を著したのであるが、空海はドラマ的な構想を以て対話を進めて行く。

（以下は、加藤精神訳注、岩波文庫本のよみによる。加藤純隆訳著『口語訳三教指揮』（世界聖典刊行協会、昭和五年二月）三二ページも同じよみによる。）

かくて（私は一篇のドラマを構想し）、亀毛先生に登場ねがって儒教を代表する客人とし、兎角先生をお願いしてその主人役とした。また虚亡隠士に登場ねがって神仙の道に入る道教の教理を述べてもらい、仮名児（仮名乞児）をわずらわして世間を出離する仏教の教理を説明してもらい、ともに論陣をしいてそれぞれにならずもの蛭公（蛭牙公子）をいましめ（るという構想の本書を執筆し）た。ととのえて三巻とし、名づけて三教指揮という。本書は私の心の問えのやむにやまれぬ気持をぶちまけただけのものであり、他人に目を通してもらおうなどというつもりはさらさらない。時に延暦十六年（七九七）十二月一日である。

ここには三種類の思想を代表する三種類の主人公が登場するのである。儒教を代表する亀毛先生の「亀毛」、「兎角公」の「兎角」は、亀の毛、兎の角であり、仏典では実在し得ないものの代表的な例とされている。だからここでは登場人物がフィクションであることが示唆されているのである。

「虚亡隠士」とは、道教では「虚無」を説き、隠者として生きる道を説くからこのようになづけたのである。

仏教を説く「仮名乞児」とは、実際に仏教を実践する者は比丘、乞食者であるから、「乞児」といい、仏教ではすべてのものは「仮名」(prajñapti)であり、仮りに設定されて名を与えられているだけであると説くので、このように名づけられたのであろう。

このように三人の論客を登場させて互いに議論させるという戯曲的な、dramatic な構想は、日本では恐らく最初であらう。

かくして上巻で儒教、中巻で道教、下巻で仏教というふうにならば、最後に仮名乞児はその所論を次のように結ぶ。

「かの仏陀が同一の言葉で妙な説法をおこなって人々の愚かな我執を打ちくだき、三千大千世界を引っこ抜いて別の世界を投げうち、大山を削らずにそのまま小さな芥子粒のなかに入れ、甘露の雨をふらせて衆生をみちびき戒め、仏法を聞く喜びを心の糧として、そのなかに智慧と戒律をくるめ、一切衆生が太平の世を謳歌して腹づつみをうち土くれを叩き、人民すべてが『君来たらば其れ蘇らん』と歌って帝王の功績を意識しない理想の社会を実現し、無数の国々がその偉大な徳に帰一し、生きとし生けるものすべてがその功德を仰ぎ慕って集まってきた、最も尊きもの、最もすぐれたものとして、多くの人々を集め、人類至高の存在となるに至っては、ああ、なんと広大無辺ではないか、この大いなる覚めをもつ雄猛の聖人、仏陀世尊の徳は、まことに高くそびえたって、その高さは比べようもなく、窮めようもない。

これこそ、まことに吾が師と仰ぐ仏陀の今に遺されている教えであり、広大な真如の法海における小さな水のあつまりではない。かの道教の仙人の小さな方術、儒教の俗にまみ

れた微々たる教えなどまったく言うに足りないものであり、立派とするには価しないものである」

このことばを聞いて、亀毛先生らは仏教に帰依することになったという。

仮名乞児の言葉を聞いた亀毛先生らは、あるいは懼れ、あるいは恥じり、おのれの無知を悲しむ一方、喜びに顔がほころんだ。彼らは仮名乞児の言葉につれてうなだれたり顔をあげたりし、その声にしたがつて円くもなり、また方にもなった。そして喜び躍りあがつてこういった。

「わたくしたちは幸運にも遇いがたい大導師にお目にかかることができ、鄭重に出世間の最もすぐれた教えすなわち仏法について承ることができました。これは昔にも聞いたことがなく、後世にもまた聞くことのできないものです。わたくしたちがもし不幸にして和尚にお目にかからなかったならば、いつまでも眼前の欲望に溺れ沈んで、かならずや『三途』すなわち地獄、餓鬼、畜生の世界に落ちていたことでしょう。

しかし今かろうじてお導きをいただいたので身も心もゆつたりと安らぎました。たとえてみれば、春雷のとどろきに冬眠していた虫が戸を開いて始めて外に出、朝の太陽の運行に暗い夜の闇が氷の解けちるように明るんでゆくようなものです。かの周公・孔子の儒教や老子・莊子の道教などは、なんと一面的で浅薄なものであることか。今からのちは、わが身の皮

膚を剥ぎとって紙とし、骨を折りとって筆を作り、血を刺しとって絵具にかえ、しゃれこうべを曝して硯に使い、大和尚の慈愛あふれる教えを書きしるして、生まれかわり立ちかえる後々の世まで悟りの世界に向かう船とも車とも致したいと思えます」

ところで仮名乞児の立場というものは、他の諸宗教を排斥して捨てさせたのではない。他の諸宗教をも生かしているのである。

すると仮名乞児はいった。

「もとの席に戻るがいい。これから『三教』すなわち儒教・道教・仏教を明らかにして、十韻二十句の詩を作り、きみたちの世俗的な歌と雑しに代わるものとしよう。

居諸破冥夜

三教襄痴心

性欲有多種

医王異業鍼

日月の光は冥き夜の闇を破り、

儒・道・仏の三教は痴なる心を襄く。

衆生の習性と欲求はさまざまなれば、

偉大なる医師・仏陀の治療法もさまざま。

綱常因孔述

受習入槐林

交輶聘公授

依伝道観臨

三綱五常の教えは孔子に本づいて述べられ、

これを学べば高官の列に入る。

陰陽変化の哲学は老聃が授け、

師に就き伝受すれば道観に地位をもつ。

金仙一乘法

義益最幽深

自他兼利濟

誰忘獸与禽

仏陀の大乗ただ一つの真理は、

教義も利益も最も深遠である。

自己と他者とを兼に利益救済し、

獸や鳥をも決して見すてない。

(以下略)

衆生の習性と欲求とはさまざまであり、種々のものを必要とするから、そこで儒教も道教も必要なのである。しかし、それらすべてを生かすものは、仏教のみである、という基本的立場を表明している。

自分の体験を追想する自伝的比較思想論として、西洋でこれに對比さるべきものは、アウグスティヌスの『告白』であろう。かれは十九歳のときにキケロの対話篇『ホルテンシウス』(いまは失われてしまったキケロの著作、『告白』第三巻第四章に言及さ

れている)を読んで深い感銘を受け、さらにマニ教、アカデメイア派の懐疑論、新プラトン派の哲学を経過して、ついにキリスト教に帰信した精神的遍歴が述べられている。この点で『三教指帰』と對比さるべきである。

しかし両者の間には大きな相違がある。アウグスティヌスは他の諸思想や諸宗教を捨ててしまった。かれを迷わしたものに言及しているだけである。ところが空海はそれらすべてに存在意義を認めて、生かしている。アウグスティヌスには他の諸宗教や諸思想を生かすという意図は見られぬ。ところが空海はそれらの存在意義を認めているのである。

空海の比較思想の体系学はさらに発展を示すことになる。かれは八〇四年に遣唐使の一行に従って長安に入り、八〇五年に青龍寺の恵実(くわじつ)に師事し、八〇六年十月に帰国した。ときに空海は三十三歳であった。

すばらしく大規模な活動を展開したのちに八三〇年に勅命により『秘密曼荼羅十住心篇』一〇巻を撰述して献上した。ときに空海は五十七歳であった。ただこの書はあまりにも膨大であったため、多くの引用文を省いて三巻にまとめたのが『秘藏宝鑰』である。撰述年時はさほど隔っていなかったらしい。

ここには、かれの多年の研鑽が盛り込まれて、体系的に詳論されている。段階的な比較思想論である。それは、かれの知り得たあらゆる思想類型を十種にまとめ、それらが逐次、後のものが前

のものを凌駕優越しているという構造をもっている。それらを【十住心】と呼ぶ。心の境地の十種類のあり方で、空海が定めたものである。それらを順次に經由して高い境地に達するといふ。

(1) 異生羝羊心。異生（凡夫のこと）や羝羊（びぎやう）のように動物的な本能に支配されている愚かな者の段階。

(2) 愚童持斎心。愚かな童子のように人倫の道を守り、五戒・十善戒をたもつ。善いことをしようとする段階。

(3) 嬰童無畏心。嬰兒にも似た凡夫や外道が人間世界の苦悩を厭って、天上の楽しみを求めて天上に生れたいと思つて修行する段階。凡夫や外道はいかにすぐれていても、偉大な仏に比べれば劣弱で愚かであることは、あたかも嬰兒のごとくである。

以上は、仏教外の教えを奉じている人々の段階である。次に、仏教内部の人々の奉ずる異なった思想段階が登場する。

(4) 唯蘊無我心。五蘊の諸法は実在するが、個体としての人間は仮のものであり、我は存在しないと考える段階。法有無我の説を奉ずる声聞がこれに相当する。つまり小乗仏教のうちの最大の学派である説一切有部の思想である。

(5) 拔業因種心。惡業を抜き去つてのがれて、煩惱の原因である無明（avidya）の種子（潜在的な可能性）を断ち切る心、すなわち十二因縁の相を觀じ、生死の苦しみを離れる段階。

緣覺がこれに相当する。つまり山林に籠つて独りで修行している孤独な修行者の思想である。

(6) 他緣大乘心。「他」とは、自分の主觀に對する他のものであり、法界（宇宙）のありとあらゆるものを緣（對象）とする。教化の對象とする。一切衆生をさとりに連れて行く乗りものであるから、大乘という。人無我と法無我をさとの段階。いかなる固定的なものをも認めないのであるが、まだ對象を見る認識主觀というものを認めている。大仏教の初門。法相宗がこれに相当する。つまり唯識説の立場である。

(7) 覺心不生心。さとした心の立場から見ると、何ものも新たに生ずるということはない。心も對象も不生、すなわち空であると觀する段階。三論宗がこれに相当する。つまり前の段階である唯識説では、心の對象は空であるが、認識作用の主体である心は実在すると考えていたのに、この段階では心も空であると考えてるのである。

「覺心」という語についての説明は序文には出ていない。しかし空海は『大日經』の住心品（大正藏、一八卷三ページ中）の文章を引用しているので、その文句と符合するから、「さとりを開いた心」または「本来さとっている心」の意に解する。以上はインドで成立した思想体系であるが、シナにおいてはさらに、右のものを凌駕する思想体系が成立した。

(8) 一道無為心。宇宙には唯だ一つの道理があるだけであ

り、無為である。「無為」とは、あさはかな人間の知慧によって何ものかが人為的につくり出されることは無いとさとする心の境地である。一実中道を説く一乗思想の段階。天台宗がこれに相当する。この立場においては、仏教の種々の実践方法がみな仏と成るための道であるということを認める。

(9) 極無自性心。「無自性」とは孤立した実体は無いということである。究極においては無自性・縁起であるということとをさとする段階。華嚴宗がこれに相当する。この立場によると、宇宙における一切の事物は互いに依存し条件づけ合って成立しているものであり、宇宙の中には孤立して存在するものは有り得ないということを明らかにする。

(10) 秘密莊嚴心。「莊嚴」とは美しく飾られ、みごとにととのえられているということである。秘密の隠れた究極の真理をさとした境地。真言宗の立場。それはまた空海自身の説く真言密教の究極の立場である。ここにおいては宇宙の一切の事物が密嚴淨土のすがたにはかならずということになる。すばらしい淨土であるというのである。

このように仏教外の諸思想をも含めて、一切の諸思想体系全体にわたって比較思想論の論述をした人は、西洋人にはいなかった。僅かに近世になってヘーゲルとかディルタイに見られるだけである。ウインデルバントの『哲学史教科書』(*Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*)には思想を類型化しようとする試みは見られるが、

弘法大師のように段階的に把握しようとする試みは見られない。ことにヘーゲルの弁証法においては、基本的原理は *aufheben* ということであるが、それは止揚または揚棄と訳されるように、次の発展段階においては、前のものは棄てられることになる。もはや顧みられない。いわゆる「文化大革命」なるが、その適例である。

また似たような見解を表明した人としてドイツの Georg Misch (1868—没年不明) がいる。かれは生の哲学の立場に立つてその著『哲学への道』(*Der Weg in die Philosophie*, 1926, zweite, stark erweiterte Auflage, 1950) においては、人類の主要な哲学潮流としてギリシアおよび西洋、インド、シナの三つの思想を並べ、ギリシアの思想潮流は自然学的 (physisch)、インドのそれは形而上学的 (metaphysisch)、シナのそれは倫理的 (ethisch) であると特徴づけ、それらの思想体系の現れたこと自体が哲学なのであるという。しかしかれはこれらの潮流のあいだの優劣は論じていない。

ところが空海の場合には、前の発展段階が人間にとってはやはりそれなりに意味をもっている。完全に棄てられることはない。いかなる思想をも全体系のうちに生かすのである。かれは人間のいさぐ誤った見解、煩惱に対しても温かい同情を示している。

これに似たものとしてインドのマダーヴァ (Mādhava 一四世紀) の『全哲学綱要』(*Sarvadarsanasaṅgraha*) には諸体系を段階的に

見なすという思想はあるが、弘法大師ほどに体系化されていない。だからわれわれは比較思想は弘法大師に始まるというわけなのである。

しかも空海の今日的意義は、人間が生きて安心立命を求める道を、体系的に把握しようとしている点に存する。今日、宗教を重んぜよ、という声がある。しかし宗教をどこまで限ったらいいか？ はつきりしない。儒教は宗教であるか、ないか、論議されている。神道が宗教であるか、ないかということは、今の日本人にとっては非常に重要な意味をもっている。共産主義の運動は、非常な情熱を伴い、排他的になるという点でしばしば宗教的であると評されている。しかし共産主義を宗教と呼ぶことはできないであろう。マルクス・レーニン主義は宗教に対して敵対的であった。だから、儒教や神道やマルクス・レーニン主義に一顧も与えないで宗教だけを論ずるというならば、それは人間論として決して十全なものではない。

では、哲学が人間の問題を解決してくれるのか？ しかし記号論理学による論理計算をいかに精密に行なっても人間の悩みは解決されない。また認識論からは価値の基準は出て来ない。だから学校で、限られた意味の哲学だけを教えるということは、無意義である。philosophia という語を最初に用いたのはギリシアのオルフェウス教の共同体であったといわれているが、かれらにとっては、「哲学」とは、人生の「生き方」であった。(John Burnet:

Early Greek Philosophy, New York: The Meridian Library, 1958, pp. 88-89) ところが今日の日本では、哲学の原義が忘れられているのではないか？ 今日、日本の諸大学では哲学の講義が盛んになされているが、「人生観」に関する講義が一つもない。人間の「生きる道」を教えてくれない。ただ西洋の哲学書に書かれていることの羅列と紹介だけだといったら言い過ぎだろうか。

今や日本の諸大学ではチグハグな、統一性のない、宗教や哲学に関する知識の切り売りがされているだけではないか。「生きる」という問題と無関係な知識の断片的取得だけだというならば、けつきよく精神分裂症的症状が見られるだけである。

思想の学問が混迷をつづけているということは、現代日本における道徳の頹廃、教育の荒廃という恐るべき事実と決して無関係ではない。この点で思想の学問をしている人間は大きな責任を感じるのである。

こういう実情を考えると、弘法大師が、あらゆる人間の生き方に理解を示し、それらを位置づけ、意義を段階的に認めて、全体的な体系を示したということは、大きな意義がある。そこには哲学だ、宗教だというようなケチな縄張り争いは見られない。人間のもつあらゆる欲望、欲求、悩み、期待と希望に正面切って、まともに取り組んでいる。人間の生きるべき道を示している。

これがまさにわれわれ比較思想学会のめざすところである。「比較哲学」という語を用いないで、「比較思想」としたわけは、

哲学の奥にあるもっと根源的なものをめざしたのである。世間には「哲学というものは無用である」と主張する人もいる。それも一つの思想である。われわれは哲学なしに生きることが出来るが、思想なしに生きることができない。

それと同じ理由により、われわれは「比較宗教」よりもさらに根源的なものをめざしている。

むしろ弘法大師からいきなり現代のわれわれにまで跳ぶわけではない。中間にも立派な学者があった。富永伸基の「誠の道」も、同じようなものをめざしていたが、西周の『百一新論』も同じような思维にもとづいている。「哲学」という語を初めて用いたのは西周であるが、かれの哲学は、重箱の隅を楊子でほじくるようなものではなかった。

だから弘法大師のような精神はのちの時代にも生きているのであるが、われわれはその源を弘法大師のうちに見出すのである。

弘法大師は、いかなる思想をも捨てなかった。いかなる異端邪説をも、その由って来る所以を見究めて、それぞれ適当な位置に位置づけた。その上で、完き人間が進むべき道を示したのである。そうしてその努力を継承し発展させることこそ、われわれ比較思想学会の使命であると確信する。

以上弘法大師の思想を主軸としていろいろ考えを述べたが、もちろん弘法大師の多数の著作のうちには現代においては適切でない立言もいろいろ見られるであろう。しかしかれのめざした意図

というものは、新しい人類の思想形成のために大きな意義をもっているものである。

そのほか弘法大師の思想のうちには、西洋にもその対比を求め得るものが多い。陀羅尼を唱え、靈験を求めるといことは、西洋においても呪術にたより、奇蹟を信じた信仰に対比される。

信徒のあいだでは四国八十八ヶ所巡礼が行なわれて来たが、西洋でも恩寵を蒙り、贖罪の目的をはたすために聖地巡礼が行なわれた。

弘法大師は「仏はわれに入り、われは仏に入る」（入我我入）と説いたが、これに対応する体験は、新プラトン派を中心にする神秘主義のうちに見られる。それはエクスタシス（*Ekstasis*）とエントウシアスモス（*Enthousiasmos*）に相当する。キリスト教の神秘家にも同様の神人合一の体験が見られる。

絶対者の顕現の視覚的具象化（マンダラ）は西洋にもその志向を認めることができる。自然万物が救済され得るかどうかということも大きな問題とされた。

これに対応する体験は、新プラトン派を中心とする神秘主義のうちに見られる。

西欧における神秘宗教は東邦のオルプエウスの信仰やミトラ信仰に由来する。例えばギリシア末期の新プラトン学派のプロティノスに見られるように、神たる一者から万物が発源することを説くことに始まり、それは精神・霊魂・物質という過程をとって発出

する（光源から光の発するように、あるいは源泉から水の流出するように）と説く。この精神・靈魂・物質という過程を逆行して人間の場合には物質即ち身体から意識に集中し更に觀念の場所たる精神に遡及することによって、やがては一者たる神との合一を成就し得るものである。プロティノスの弟子たるボルフリオスのプロティノス伝によれば、プロティノス自身がその生涯において五年間に四度恍惚の状態において神との合一を達成したといわれる。新プラトン学派は既にギリシアの末期においてキリスト教の起つて来る時代にあつて宗教的色彩を最も強くもつものであるが、プロティノス以外に一般にはヘルメス祈禱書の中に示される合一の体験は最も原始的な前ヘラス的なものへと向う反動であつた。そしてそれらの人々と神との間におこる合一の手段は、いつもエクスタシス（靈魂が肉体から脱すること）とエントウシアスモス（神が礼拝者の中にはいつて来ること）とを通じて起るのである。この Ekstasis と Enthousiasmos が真言の入我我入と全く同一の体験の少しく異なつた表現であることに人は気付くであらう。そして「汝が吾のあるところのものとなり、吾が汝のあるところのものとなるよう、花嫁としてその花婿を迎える準備をなすべし」とか「吾は汝の中に、汝は吾の中に」「みどり児の女の腹に宿るごとく吾のうちに入り給へ」という祈りとなるのである。

弘法大師は多方面に功績のある人であつたから、種々の面で論ぜらるべきであるが、比較思想の立場から特に注目すべきは、綜

芸種智院を創設したことである。それはかれの思想から論理必然的に導き出されたことである。

綜芸種智院は日本で最初の庶民学校であつた。平安時代の初め頃の教育制度は平安京に大学、地方に国学があり、いずれも官吏養成の機関であつた。また貴族階級ではそれぞれの氏族の子弟を教育する学校を設置していたが、これらはいずれも一般庶民には門戸が開かれていなかった。そこで空海は天長五（八二八）年十二月十五日、京都の九条にある藤原三守の広い邸宅や土地を譲り受け、民衆のための学校を創設した。その教育方針や内容などは『綜芸種智院式並びに序』（統遍照発揮性靈集補闕鈔）巻第十に収められている）によつて知ることができる。

（以下は筑摩書房『弘法大師空海全集』第六卷（昭和五九年十一月六四四ページ以下、牧野良海師の邦訳による。）

さきの中納言藤原朝臣三守卿は、左京の九条にその邸宅があり、土地は二町有余で、家屋は五間になつてゐる。東隣は施業慈院であり、西は東寺に近い。南は葬送の墓地に近く、北の方には官の食品倉庫が立つてゐる。湧泉が南と北とにあり、鏡のように澄み、左と右には小川があふれ流れてゐる。松や竹が生い茂つており、風があれば琴箏を奏でるごとく、梅花青柳の色は雨氣に催されて、あたかも錦繡のごとくに美しい。春には鶯が囀り、秋には鴻雁が飛びゆく。炎熱の時もここに憩えば暑さを忘れて清涼を感じる。西方には、四神の

うちの白虎びやくこにあたる大道があり、南方には朱雀しゅくさくにあたる小沢があるという地相である。僧俗が逍遙しようと思えば、ことさらに遠方の山水を求めずともこの処で足りるのであり、朝夕ひっきりなしに車馬が往来している。

貧道空海は、かねてから衆生済度の願望があつて、ひそかに儒・仏・道の三教を学ぶ学院の設立を切望していたのであるが、ひとたびその主旨を発表するや、三守卿は即座に千金にも値する住居を提供された。契約のことなどは全く度外視し、自らの未来の菩提成就に役立つようにと寄附されたのである。昔、給孤独が黄金を敷きならべて買い求めた土地を仏に献じ、やがて勝軍王の林泉を貰いけることができたという、その説話のような苦勞を経ずして藤大卿の林泉を入手することができた。私の本願はかくてたちまちに契なつて成就したので、この邸宅を名付けて綜藝種智院しゆげしゆちいんということにした。そこに表明されている理想は、「衆芸」すなわち諸の学問を「綜通」すなわち綜合して「智」すなわち知識を種くさえることである。それはまさに西洋における大学の理想に合致する。大学の原語名 university は unus (一) に諸の学問を向ける (versus)、統一するということ (―tas、抽象名詞の語尾) に由来するラテン語 universitas に由来する英語である。

ところが明治以後の日本人は、これを「大学」と訳した。「大

いに学ぶ」(Great Learning) という意味であるならば、儒教の經典の一つに「大学」があり、曾子の著とも言われているが、四書の一つとして、宋学では特に重んぜられた。ところが明治以後、日本で「大学」というときには、大きな校舎と、広大な敷地、莫大な資金、多数の教師や学生のいるところを意味するのであり、基準の立て方が唯物論的である。そこには精神が認められない。諸の学問を綜合するという西洋中世以来の理想は顧みられていない。大学の規模が広大となると、セクシヨナリズムと縄張り根性のみが支配し、偉大な学問を創造するという理想は見失われてしまふ。university の語義さえも、人々は忘れているではないか。

ところが弘法大師は、この学問の理想を明白に表明した。綜藝種智院の理想はまさに大学のあるべき真のすがたを明示している。ヨーロッパの遍歴学徒たちが、ボローニャやパリなどの学問中心地に集まって universitas と呼ばれる学問共同体を形成したのは一二世紀に始まる。ところが弘法大師のこの学院は九世紀初頭であるから、西洋の大学より三百年以上古い。弘法大師こそ世界最古の大学創設者である。「インドのナールランダーの大学などはそれよりも古いが、その大学創設の理想を説いた文章は残っていない。」

世間の人々は綜藝種智院の意義を軽く見て、民衆のためのいわばカルチャー・センターくらいにしか考えないが、事情は逆である。政府のつくった学問所は、官吏養成機関にすぎなかった。寺

院にあった学問所は、仏教の教義学を中心に教えていた。いずれも目的が限定されている。ところが弘法大師のこの学院は、世俗と宗教とを一貫して綜合した、新しい学問をめざしていたのである。

思うに、古来よりの九流・六藝は世を濟うための舟や橋にも比すべきものであり、一方、十藏・五明の仏の教えと学問は、世人を利益する宝である。だからこそ過去・現在・未来の三世におわす如来も、仏教の学問と世間の学問とを兼ね学んで偉大なる覺りを成就されたのであり、あらゆる菩薩賢聖も、これらの教学にすべて通曉して完全なる悟りの智慧を証したもうたのである。五味のうちの一味のみでご馳走ができたり、五音のうちの一音のみで妙音を奏でることなど、いまだかつてそのためにはあるまい。立身出世の要点、治国の道はいわずもがな、この世で生死の苦を断じ、彼岸にあって涅槃の樂しみを証することも、この衆藝兼学の理を捨ててはなんびとといえども到達し得ないであろう。それゆえに、欽明の帝以来の聖帝賢臣らが寺院を建立されて、これを仰いで仏道を弘めたもうたのである。

しかしながら、寺院の僧侶は、一方に偏して仏教の經典のみを学習し、大学の俊秀は、仏典以外の書物のみを読みふけているのが実情である。このようにして、三教の書や五明の書のような全般にわたるものについてはふさがりとどこお

って通じない。だからこそ綜藝種智院を建てて、広く三教全般にわたって多くの学匠を招く次第である。このうえは、三教の学を明らかならしめて無明（根源的な無知）の闇路に迷う人々を導き、五乗の教法を用意して等しく一様に人々を覺りの世界へ驅り立てんものと、切に願う次第である。

ただ当時、こういう独創的な学院は、経営は決して容易ではなかった。その困難さは、すでに予見されていた。

ある人が、非難して言う、「貴僧の願望は結構であるが、このような事業は先覚者もやりもしたことだ、いまだに有終の美を見ていない。何となれば、かの吉備真備の儒仏二教院と石上宅嗣の芸亭院など、これらの私学院はみな始めあつて終りなく、人は散り去つてその跡は見るかげもないありさまではないか」と。

答えて言う、「物の興廃は必ずその人による。人の昇沈は必ずやその道の学び方にある。大海は多くの流れが注がれてこそ深くなり、須弥山は塵が積り積つて高いのである。大建築は多くの木材が支えてこそ聳え立ち、一国の元首は股肱の臣下によつて扶けられてこそ保たれる。かくて多数の同志さえあれば尽きがたく、同類が少なければ傾きやすいのは自然の理である。今、わが願うところは、上御一人が恩命をくだしたまい、三公が協力され、名門の貴族方や諸宗門の名僧方が同志として助勢をたまわるならば、この事業は末長く継続

されるであらう」と。

難じた者が言う、「それならばよろしかろう」と。

或いはまた別の人が難じて言う、「今、国家が広く学校を開いて諸藝を勧め励ましている。強力な国学・大学がある以上、^{あや}眇たる一私学など、世間になにほどの利益を与え得ようか」と。

答えて言う、「大唐の都城では、各坊ごとに勉学の塾があって、広く幼年者を教えており、各県ごとに郷学が開設されていて、広く青少年を指導している。だから才智ある者が城内に溢れており、六藝に秀でた士が国内にみちている。ところが今日、この平安京には大学がただ一校あるのみで、勉学塾はまったく皆無である。このために、貧賤の子弟は知識を求めたてでもなく、学問を好む遠方からの子弟は通学するにも疲労が甚だしい。今この一学院を建ててあまねく学童の蒙を啓こうと思うのである。また善きことではないか」と。

難じた者が言う、「もしよくはたしてそのとおりになるとすれば、それこそ善美をつくして日月と光明を争うほどであり、天地とともに不朽を競うであらう。これこそ國に益を与えるの妙計であり、人を利する宝珠にも喩えるべきである」と。

わたくしは不敏ではあるが、九仞の功を一簣に欠くような失敗をせぬよう、いま一段と努力をし、微塵の土を積み重ねて國土八方の飾りともなる岡に築きあげ、広大なる四恩の徳

に報い、三点の仏果を得る善きすがにしようと願う次第である。

〔師を招く章〕

『論語』にいう、「人は仁の美風のある所にこそ住むべきであり、居所を択んで仁の氣風のない所に止住するならば、どうして智者といえようか」と。また同じ書に、「六藝に遊ぶ」という主旨の言葉もある。『大日経』には、「初めて伝教の阿闍梨になるには、まず衆藝を兼ね学ぶべきである」とある。『十地論』という、「菩薩は菩提を成就するためにまず五明の学問を研究して法を求めるべきである」と。

だからかの善財童子は百十城を巡り歩いて五十三人の師を尋ね求め、常啼菩薩は常に一市に哭して般若の法を求め続けたという。したがって、智慧を得るためには仁者の郷に処るべきであり、覺りを成就するためには五明の法に頼るべきである。法を求めるには必ず大勢の師のうちからその人を得べきであり、学道のためには衣食の資も必要である。以上の四者が具備して初めて事業が完成する。故にこの、処・法・師・資の四つの条件を設けて多くの人々を利益し救済しようとするのである。

処あり、法ありとしても、もし師を欠けば理解を得るすべがない。だからまず師を招請しなければならぬ。師に二種類があり、一つは仏道の師、二つは世俗の教師である。前者は

仏教の經典を伝え教えるもの、後者は仏教以外の典籍を教え弘めるためのものである。仏法も世間の教えもともに修得すべきであるとは、わが師の正しい訓えである。

一つ、仏道人伝受の心得のこと。

右、顕密二教を学習することは僧たる者の本分とすべき嗜みであるが、もしさらに仏教以外の書にも通じようと思うならば、俗の博士に一任して修學すべきである。俗人であつても、仏教の經典・論書を學ぼうと心に願う者があれば、僧侶を師とすべきである。その師たる者は、心は四無量心・四摂法に住して勞苦を厭わず、貴賤の差別をせず、よろしく指導伝授すべきである。

一つ、俗教の博士の教受の心得のこと。

右、九經九流、三玄三史、七略七代について、もしくは詩歌・銘賦等の文学作品につき、音や訓、句読あるいは通義などに精通している者で、これらの文獻にわたつて一部の書・一帙の本、いづれをとつても童蒙を啓発する學識のある者は、教師としてこの學院に住せられよ。もし仏道の人で心に仏教以外の典籍を學ばんと願う者があれば、才徳秀でた人、孝廉の士がそれぞれ適宜に伝授せられよ。

もし青少年の學生生徒で文字の読み書きを學ばんとする者があれば、儒教の先生は、慈悲の心を持ち、忠孝を念頭において、貴賤貧富の隔てなく適宜に指導を与え、倦むことなく

諄々と教えられよ。三界（この世界）の衆生はみなわが子であるとは大覺世尊のお言葉であり、四海（世界中）はみな兄弟であるとは聖人孔子の名言である。この言葉をよく仰いで忘れないようにせねばならぬ。

一つ、師と弟子と、ともに糧食が必要であること。

人たる者はぶらさがっているにが瓜ではないとは孔子の格言であり、人はみな食によつて生きる者であるとは釈尊の所説である。したがつて、その道を弘めようと思うならば、必ずその人々に飲食を与えねばならぬ。道人・俗人たるを問わず、また先生と弟子たるとを問わず、いやしくも學道に志す者にはみな等しく給費すべきである。

しかし、わたくし空海はもとより清貧を旨としているから、まだ充分に必要な経費を支弁できないが、とりあえず若干の物資を費用として充當したのである。もし、國を益し、人を利せんとする志があり、迷いを去り覺りを証せんと志し求める人があれば、同様にたとえ些少たりともこの學院へ施入して、わが願いに協賛せられよ。世々生々にわたり、ともどもに仏の教への力をかりて大衆に利益を与えたきものである。

天長五年（八二八）十二月十五日

大僧都空海記す

こういつて綜芸種智院の式を結んでいる。

その教課内容は、民衆のためのものであったから程度は低かつ

たかもしれない。しかし、学問の総合という高い理想は、いかに高く評価しても、過ぎるということはない。

空海の没後、この学院の経営は行きづまった。適当な後継者がいなかった。この学校は借しくも承和十四（八四七）年に閉ざされた。弟子たちはこれを売り払って、丹波大山莊を買い、東寺領とした。しかし空海が示した学問と教育への熱意とその理想は世界の教育史上高く評価さるべきである。

現在〈教育の荒廃〉ということが盛んに論ぜられているときに、われわれは、祖先である弘法大師の理想に聴くべき点が大きいと思われる。

以上、いくつかの観点から、弘法大師空海が日本における比較思想の始まりであることを述べた。

（なかむら・はじめ、比較思想学会名誉会長）